

技術士の目へ寄稿する機会を頂いた。私は地熱の技術者として歩んできた。最近では若手の育成がタスクであるが、何をどう教えたらいいのか悩むことも多い。しかし、振り返ると私自身も多くの言葉を受けて今日に至っている。そこで、私自身の歩みを振り返り、心に残っている言葉を整理することで、若手育成のヒントが得られると考えた。以下、私の心に残った言葉をいくつか紹介する。

①『一人前の地質屋になるには10年かかる』

今から25年前、私は大学の地学科を卒業し、今の会社に入社した。当時は地熱開発が盛んで、深度2000mを超える地熱井が各地で掘削されていた。私は入社後、現場で坑井地質調査に従事した。しかし、掘削では岩石試料が数mm程度に砕かれた状態で採取されるため、そんな状態の岩石試料を見たことがなかった私は調査で時間を浪費した。また、地質の調査結果を報告しても相手の理解が得られないことも多々あり、落ち込むこともあった。その時の上司の言葉である。

私は岩石・鉱物の見え方を再勉強した。また、他分野の技術者、掘削担当者及び発注者との議論では、“地質情報の伝え方”に気を配るようにした。最初はお互いのイメージが食い違って苦労したが、次第に意思疎通できるようになった。今、振り返るとあの言葉で気持ちを楽にさせてきたと思う。

②『文章には“その人”が現れる』

入社から9年後、私は諸事情で大学にて教員養成向けの小論文作成を受講していた。大学生と同様、期日までに小論文を書いて提出したが、最初の数行でインパクトが弱いと指摘されて何回か書き直した。その際の八木先生の言葉である。推敲不足から生じる自信のなさが文章に現れているのを指摘した

言葉だった。自分の文章を見つめ直した。作文力は人生の武器と認識するきっかけになった。

③『あなたの総合解析、地質に偏っている。視野が狭い！』

私は復職後、探査結果を総合解析して有望ゾーンを抽出し、地熱井掘削ターゲットを提案する業務を担当した。総合解析で扱うデータは地質、地化学、物理など広範囲に及ぶ。しかし、最初は専門の地質のみ充実した内容の総合解析になっていた。その時の上司の言葉である。専門以外のデータが活かされていないのを指摘した苦言であった。

ある時、同僚と雑談中、『地熱の3要素 熱源・割れ目・流体』が会話に出てきた。ハッとした。3要素は地熱に携わった者には馴染みの用語である。要素にそって情報を整理し、総合解析を行い、調査提案・受注に繋がれば良い。視野を広くする一筋の光となった。

④『組織は、リーダーの力量以上には育たない』

野村克也監督の有名な言葉である。私がグループ長として部下を統括する立場になった頃、本からこの言葉が目飛び込んできた。途端にリーダーの重責をズシリと実感した。自分が組織の蓋になってはいけない。まずは、自分から足を運んで相談に乗ること、判断を明確にすることを心掛けるようにした。

①～④以外にも考えや行動の改善に繋がった言葉がある。多くの人から言葉という支援を受けていたことを実感する。一方、「ことばで失敗しない人がいたら、その人はからだ全体も制御できる立派な人です（聖書）」と怖い言葉もある。これからも技術士として必要な時に適切な言葉をかけ、若手技術者の育成、業界の盛り上げに貢献したいと思う。